

昭和三十五年四月二十一日 「仏教講話」

## 「和敬と縁の世界観」

理事 江部鴨村先生

交響楽はそれぞれ異なる楽器の演奏者が合同し、

一人の指揮者のもとに同一曲譜を演奏することによって成り立つ。交響楽に欠くことのできない条件は、異質の楽器の渾然たる調和であり、楽人同志の相互敬重である。交響楽において独善主義や英雄主義やエゴイズムはゆるぎされない。個としてはいかに優秀であっても、全との調和が両立しないかぎり、交響楽の異端者・破壊者として当然排除されなければならない。いわんや優秀ならざるぼんくらの我儘者においておや。

人間社会の合理的なありかたは、さながら交響楽のようなものだといわれる。それもそうに違いない。そうだとすると、よりよき社会の建設において、いかなる生活態度がプラスとして要請せられ、いかなる生活態度がマイナスとして拒否されるかは、説明を待たずして明白だろう。まことに和敬こそは、よりよき社会の交響楽を成立せしめる基本的条件でなければならぬ。それゆえ和敬は道徳であるばかりでなく、道徳であるとともに、時処の制約を超えた道徳

以上のものでもある。

私は仏教専攻の老書生であるが、自分の専門の立場から、仏教と和敬との関係について若干言及したいとおもう。もちろん、和敬は仏教の専売ではなく、他の宗教もおおかた同様のことと思うが、今しばらく仏教に限定していうと、仏教の典籍はいうまでもなく諸経典のなかに、和敬という文字および和敬の同義異語が随処に発見される。二、三の例をあげると、和敬に六種の別があるとすると六波羅密経に「六和敬を行ないて大導師となる」とある。大導師とは大宗教家、あるいは大指導者の意味と解してよい。また無量寿経におなじく六和敬をあげて「六和敬を行じてつねに法施を行ず」とある。法施とは説法のことである。六和敬の何たるかについては大乘義章ならびに法界次第にくわしく説いてあるが、要するところ恣意的行為に流るることなく、身・口・意の三業と、布施・持戒・忍辱の三行において、それぞれ実のごとく和敬の精神を具現すべきことを具体的実践的に解

明したものにほかならない。

もつとも仏教と和敬との関係は言句の末梢に跡づけるまでもなく、仏教それ自体の構成が和敬精神にもとづいているのである。仏教は仏と法と僧の三要素から成り立つ。仏法僧の三要素を交響楽にたとえるならば、仏は指揮者であり、法は楽譜であり、僧は楽士にあたる。仏法僧のうち、どの要素を欠くとしても仏教の交響楽はなりたたない。仏と法と僧とはともに聖価値の象徴として三宝と称せられる。仏教徒であるかぎり三宝を尊重しないということはない。南無仏・南無法・南無僧は仏教徒の国内的、あるいは国際的合言葉である。ビルマやタイ等の南方仏教国では、経典や教理にかいもく盲目であっても、身に黄衣をまとい口に帰依三宝の合言葉を唱えさえすれば、僧宝として衣食は随処に供養せられ、終生食いつばぐれはないという。わが国において和国の建設を理念せられた聖徳太子は、十七条憲法の第一条において「和を以て貴しと為し、忤(さか)らうことなきを

宗となせ。云々」と宣示せられ、国民同和の方法として、おなじ憲法の第2条に「篤く三宝をうやまえ。三宝とは仏と法と僧なり。云々」と表明せられた。これは仏教にたいする甚深の理解者たる聖徳太子としては当然のことである。

仏教が和敬の宗教である理由は、仏教独自の世界観、すなわち「縁」の世界観に基づく。仏教は縁をもって世界説明の根本原理とする。ちようどキリスト教がゴッドをもって世界説明の第一原理とし、マルキシズムが唯物弁証法をもって世界説明の究極原理とするように。縁とは「結びつき」を意味する。ものはそのもの以外のものとの結びつきによつてのみ存在する。他のものとの結びつきをはなれて何者も存在することができない。この事實は一つのものに妥当するばかりでなくあらゆるものに例外なく妥当する。ものの生起も、ものの壊滅も、他のものとの結びつきによらぬということはない。いわゆる「彼れ生ずるが故に、是れ生じ、是れ生ずるが故に、彼れ生じ、彼れ住するが故に、是れ住し、是れ住するが故に、彼れ住し、彼れ滅するが故に、是れ滅し、是れ滅するが故に、彼れ滅す」というのが縁の世界観の帰結である。縁の世界観からいえば、ものとももの結びつき方は、一と一との結びつきではなく、一と一以下のものとの結びつきでもなく、また一と

一以上の一定数の結びつきでもない。あらゆるものがそれぞれにおいて一と一切(全)との結びつきなのである。自の一をして自の一たらしめるものは他の一切であり、他の一切をして他の一切たらしめるものは自の一である。それゆえ他の一切との結びつきをはなれて自の一はありえないと同時に、自の一をはなれて他の一切はありえない。一と一切とはこのように切るに切れぬ相資相成の関係である。また一と一切とは外的に相依相関するばかりでなく、内的に一切を容れ一切に一を宿す相即相入の関係である。かくのごとく、ものとももの結びつきは縦横無尽で複雑幽微をきわめるが、せんずるところ一即多・多即一(個即全・全即個)の関係となる。これは決して推理や臆測や觀念の所産ではなく、いかなる事物にも妥当して例外のない客観的科学的事實である。

このような縁の世界観からいかなる人間の生きかたが合理的にみちびき出されるだろうか。それはいうまでもなく和敬本位の生活でなければならぬはずである。

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。